

農業・農村生活体験のビジネス化

(2019年度 和歌山大学食農総合研究所 現地研究会)

2020年6月

和歌山大学 食農総合研究教育センター

農業・農村生活体験のビジネス化

(2019年度 和歌山大学食農総合研究所 現地研究会)

植田 淳子

原見 知子

和歌山大学 食農総合研究教育センター

2020年6月

はじめに

2019年11月25日の食農総合研究所「都市農村共生研究ユニット」現地研究会は、和歌山県新宮市にある熊野川総合開発センターで開催された。

今回は『農業・農村生活体験のビジネス化』のテーマで、原見知子氏と当研究所特任助教の植田が講演を行った。講師の原見氏は、日高川町のゆめ倶楽部21の前会長で、和歌山県内でも先駆的に都市農村交流や移住者の受け入れに取り組んでこられた方である。

原見氏には、「中山間地域を活かす～人こそが地域を創る」とのタイトルで講演をいただいた。ゆめ倶楽部21は、この種の活動としては県内外に知られる先駆的な役割を果たしてきた団体である。そこには、事務局長として行政や地域住民とのきめ細かい関係を築いてこられた現会長の山下泰三氏のご活躍があった。講演は、会のこれまでの具体的な活動内容を紹介したものである。

この研究会には、大学の研究ユニット参加教員のみならず、広く地域の方々にもご参加いただいた。その中には地域の行政職員、周辺地域において都市農村交流活動や交流・滞在施設を運営されているの方々、また新規移住等に関わるの方々なども含まれていた。みなさん都市農村交流事業や移住受入れに興味のあるの方々ばかりである。そのため本講演内容は、同種の課題に直面する参加者にとって有意義なものとなった。

今回の原見氏のご講演は、事情により当日ご登壇いただくことが叶わなかった山下氏からバトンを託された形で実現したが、講演中に何度も現会長の山下氏の活躍を伝えられ、ゆめ倶楽部21の信頼の堅さを垣間見る思いがした。

本資料は、その講演と、その後行われた質疑応答の内容をまとめたものである。本資料が、地域活性化事業の推進に真摯に取り組まれている方々の一助になれば幸いである。

最後に、突然の講師交代にも関わらず、ご講演を快くお引き受けいただいた原見氏には感謝を申し上げたい。さらに、本資料への講演内容の掲載にもご快諾いただき感謝に耐えない。また三津ノ地域活性化協議会、和歌山県東牟婁振興局およびJAみくまの関係機関の方々には、開催にあたり多大なご協力をいただいた。厚く御礼申し上げたい。

なお、食農総合研究所研究成果第10号にも、『日高川町ゆめ倶楽部21の体験型観光・移住支援等の取り組みと課題』についてまとめている。併せてご一読いただければ幸いである。

2020年6月

和歌山大学 食農総合研究教育センター
特任助教 植田 淳子

目 次

グリーンツーリズムの展開と推進上の課題	-----	1
中山間地域を活かす一人こそが地域を創る	-----	9
質疑応答	-----	21
付属資料	-----	35

グリーンツーリズムの展開と推進上の課題

和歌山大学 食農総合研究所
特任助教

植田 淳子

1. はじめに

皆さんこんにちは。今日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。

和歌山大学食農総合研究所の特任助教をしております植田淳子と申します。今日はまず私の方から、『グリーンツーリズム』というのは、どんなことをしている活動なのか、あるいは、どんなことをしていったらいいのか等、活動や理念について最初にお話しさせていただきます。

その後、原見さんの方からは、実際に動いている具体的な地域の活動のお話が聞けると思います。それでは宜しくお願い致します。

2. グリーンツーリズムの始まり

グリーンツーリズムというのは、もともとヨーロッパのバカンス（長期休暇）法を背景として広がった農村滞在の余暇活動であり、農村政策として開始されたものですが、日本でも中山間地域の活性化策の1つとして、1990年代頃から始められました。

その前に、日本では『農村地域と都市との交流活動』ということが、1980年ぐらいから進められており、農林水産省のこの図でもあるように、都市交流活動の中に、グリーンツーリズムというのが位置づけられております。

後ほど詳しく説明しますが、このグリーンツーリズムという形態には、いろいろな形がございます。例えば農家民泊や、観光農園、農産物特売所また滞在型市民農園、そういうのも含めてですね、グリーンツーリズムという言い方をしております。

なぜこの“グリーンツーリズム”と政策が日本で注目されるようになったかといいますと、やはり今の日本社会の現状の中で、都会の人たちがなかなか休めない、今働き方改革と言われていますが、なかなか上手に休みが取れない、生活も不安な中で残業も多く日常の中でストレスが溜まってしまう。そういう中からストレスを感じて、こういう自然の中でゆっくりしたいとか、時間を忘れて田舎の中でのんびりしたいなどそういうリラックス、リフレッシュをしたいという都会の方が田舎の方に来ているということ、増えているということが、1つあると思います。

あるいは、食への関心が高まったということもあげられます。手作りのものだったり、安心・安全だったり、おいしい田舎の食材を使ったものを食べたい、そんな食材を買いたいと希望する方が増えていたりとか、自然の中で体験や田舎の方と交流をして、「物」とか

「体験」だけではなくて、「人とのふれあい」や「心の交流」を目的にいろいろとお話したい、そういう方が増えているという都会の現状もあると思います。

一方で農山村では、高齢化や過疎化の進行が進んでおまして、集落で自己管理が困難になっている現状だとか、またそれらの現状を踏まえ、ただ嘆くのではなくて、やはり今自分たちにあるもの、できることで何とかしようというということで、農村で起業し、お客さんを迎える動きがあります。今日のお昼に食べに行きましたが、『かあちゃんの店』というところで、地元の食材を使ってお母さん達が料理をつくり付加価値を付けて提供したりすることなど、農産物直売所とか、加工体験活動、農家民泊、こういったことを農村側では推進しております。

こういう都市側からのニーズと農村部のいろんな事情等が相まって、このグリーンツーリズムというのが日本において特に盛んに1990年ぐらいからいわれるようになりました。

3. グリーンツーリズムの多様な形態

皆さんも、「グリーンツーリズム」という言葉は、新聞や雑誌で見たりニュースで聞いたりしていると思いますが、それではどういったことなのでしょう。

簡単に申し上げると、大きな旅館やホテルなどの立派な集客施設をドンと建てるのではなくて、今皆さんが生活しているこの暮らしとか生活をお客さんにちょっと開放して、そこに来てもらって普段の田舎の生活や農作業というのを経験してもらい、そして楽しんでもらうという新しい旅のスタイルです。

自分たちの生活の中にお客さんを迎え入れるというようなこの考え方は、もともとヨーロッパでフランスとかドイツ、イギリスなどから始められたものです。日本でも90年代ぐらいから始められてきました。

例えば、これまでの観光リゾートといいますと、街の中心部とか大きいホテルとかそういったものを建てて、地元の人が知らないうちにそういうものが建てられる。そこにお客さんに来てもらいその建物の中で、お風呂に入ったり食事をしたり買い物をしたり、その中で完結をしてお客さんもそのホテルから出ることがなく終わってしまって、家に帰るといったことが多かったと思いますが、このグリーンツーリズムというのは、農村の皆さんが住んでいるその暮らしの中にお客さんに来てもらう。そしてそのままの暮らしを提供する。こういった考え方になっていますので、ちょっとこれまでの観光リゾートとは異なる考え方となります。

グリーンツーリズムは多様な形態があり、こういった農家に泊まる農家民泊、農村民泊、農家民宿等の宿泊形態があり、自分たちの生活の中にお客さんを迎える形態から、農作業や料理等の体験を一緒に行うこと、またジャムとかジュースとかおやつなどお菓子づくり、そこでできた農産物を使って加工品を一緒に作る農産物加工体験、また地元の手作りの料理を一緒に食べる場所、まさに「かあちゃんの店」みたいな、そういった農家レストラン、地域ならではの農産物が買える農産直売所、地元の名産物を購入できる場所など、こうい

ったいろんな活動が、グリーンツーリズムの多様な形となっています。

ですので、グリーンツーリズム=食べること買うこと、体験すること、泊まること、と限定することなく、全てをひっくるめて、農村でゆっくりのんびり過ごしてもらおうとする考え方が、グリーンツーリズムの考え方だと思っていただけたらと思います。

4. ゆっくり滞在してもらうための仕掛け

グリーンツーリズムで大事な事は何だろうっていうのを考えてみました。やはりまず、都市の方々にこの地域に行ってみよう。テレビとか雑誌とかインターネットとかでいろんな情報を得ることができるけど、自分たちで行ってみようと、足を運んでもらえるような動きが大事だと思います。

時間をかけてここに来たら、最初は日帰りで帰るというのもあるかもしれませんが、ちょっとゆっくり滞在してもらう動き、施設とか体験ですとか、交流も含めて来た人にちょっとゆっくり滞在してもらう動きが次に大事です。

2、3時間で帰っていたのをちょっと長期、何時間か増やしたりとか、一泊してもらったり、ゆっくり連泊で滞在してもらう。そしてできれば、帰りには、地元の食料やお土産などが美味しかったからと買って帰ってもらうとか、また2度、3度と足を運んでもらう。

そういったことがグリーンツーリズムの考え方として大事なことかなと思います。

ゆっくり滞在してもらうといいましたが、これは体験や交流も含めますが、受け入れる方々にとってはボランティアではない。受け入れることである程度お金も落ちるといふか、幾らかこれで副収入やお小遣い程度になるということが、続けていくには大事だと思います。

また、リピーターになってもらう、ファンになってもらうということも重要で、一回来てきようならではなくて、「行ってらっしゃい、またおいで」という形で、何度も行ったり来たりできる関係作りがグリーンツーリズムでは大事なことかなと思います。

5. 地域の中で連携する

またこの地域も多くの農家やレストラン、お店、宿泊施設などがあると思いますが、一つの施設とか一軒の農家さんだけで完結してしまう、あるいは個別に動くのではなくて、この地域全体で動いていくといふか、グリーンツーリズムの考え方として連携していくということも必要となります。

グリーンツーリズムというのは、農村に滞在する、あるいは、農家の方の家に泊まり話しをする、また、お客さんの希望があったら一緒に田舎の料理を作ったりとか、農作業を体験する。都会の方も来て、時には近所の方が遊びに来て、これは別に親戚とかではない全く他人の方ですけども、農家で滞りをきっかけに交流が広がり遊びに来ることができるような関係ですね。

ご飯を食べるのは農家さん宅と一緒に作って食べることもできますし、希望があれば「か

あちゃんの店」のような地域の食材を生かしたお店にご案内したりなど。そういった地域のレストランを上手に活用する。お風呂なんかも地元の温泉など、入浴施設を利用する。買い物にしても、もしかしたらお世話になった農家の人たちがおいしかったらこれ持って帰りよとか、これあげるよと言って頂いて帰ることも多いと思いますが、できたら何か買いたい場合は、直売所のお店があるよとか、たくさん地元の品物があるよとか教えて、地元の地域の直売所を利用してもらう。

グリーンツーリズムの考え方としては、こうやって来たお客さんや利益を一軒の農家さんたちや施設で終わらせることなく、地域内で循環して、地域に還元していく発想です。

そのためには、地域の中で連携が大事だと思います。情報の共有も、ある程度必要で、大きな団体のお客さんが今、この施設に入っていると、関係者だけではなく住民の方にも、ある程度の情報をお知らせして対応していくということは、必要なと思います。

6. 地域のことを知る

私が以前、働いていた大分県の安心院町というところでは、まず農家の人たちが、主体となり活動を立ち上げたのですがグリーンツーリズムの活動を始める時に、まず「ふるさと探訪の旅」というものを企画しました。

これは、地域に住んでいる人たちが“自分たちの地域を知るため”に、実施したものです。普段暮らしている地域にどんな食べ物があるかと、あるいはどんな歴史があるか、どんな文化があるか、昔から大事にされてきた場所、そんなことをまず自分たちが知るということを始めました。これは村のお年寄りの方に聞いたりとか、観光協会の会長や会員さんに聞くことをはじめました。

人に来てもらいたいと思うならば、まず自分たちが地域のことを知ることが大事だと思います。そして、この地域にはこういうものがありますよ。来たお客さんがその「お店」だけ、「温泉」だけ入って帰るのではなくて、ついでに、近くのここに寄ったらこんな歴史がありますよというのを、手作りのマップを自分たちでまず作りました。

作りながら、自分達の町にはこういったものがあるのだということを知って、それをお客さんに伝えることができるというのが、それがグリーンツーリズムの第一歩かと思います。ちなみに、安心院町の場合は、民間から立ち上がった活動を、行政も“町のためになる”と考えサポートする形をとり、活動がスタートしました。また、安心院町グリーンツーリズム“研究会”と名付け地域住民だけでなく、町外の方も、興味のある方は皆、会員（応援団）として、参加してもらいました。

7. 地域の食を思い出とともに

またグリーンツーリズムに取り組むようになり、徐々にお客さんも来るようになったのですが、外から来た人が喜ぶ、楽しみにしているのは何かというと、やはり、スローフードとか農村民泊で食べる「地域の食」ですね。やはり「旅の思い出は食とともにあり」と

ということですが、地域の食や食文化に触れるということもすごく喜ばれて帰っていったように思います。

地域の美味しいものを食べられる場所があること、一緒に作れる体験できるような施設があること、まずそれを来たお客さんだけがやるのではなくて、地元の人と一緒に話しながら、これはこういう時に食べるものなのよと言って、交流コミュニケーションをとりながら過ごせるということが、すごく来たお客さんにとっては満足の高いものになっていきます。

もしかしたら、田舎とは違う食べ方も都会ではあるかもしれませんが。一方的に教える・教えてもらう関係ではなくて、一緒に作業することで互いの勉強になると思います。そしてその食べ物の味と、その食べ物を教えてくれた人とその風景が、地域とともに思い出になって帰って行くということに繋がりますので、この「食」というのはグリーンツーリズムにとって大きなものになると思います。

8. 何度も行き来し合う関係に

グリーンツーリズムでは、あれがまた食べたいからこの地域に来る、この時期に来る、ということもよくあります。何度も来てもらえるような楽しい交流ができる、地域のファンを増やしていく。必ずしも一回だけじゃなくて、何度も何度も足を運んでももらえるような地域のファンを増やしていくということが、グリーンツーリズムには大切な考え方かなと思います。

この写真は、大分県の安心院町の農村民泊の食事の一場面ですが、来たお客さんと囲炉裏を囲んでご飯を作ったりですとか、地元でとれた山でとれたものを出したりだとか、それをお客さんだけが食べるのではなくて地元の人と交流をしながら食べるというのが、来たお客さんにすごく喜ばれることでした。

また10月、11月の秋になると、写真にあるようなこういった自然薯掘りとか、きのこ採りに行ったりとか、鍋にして食べたりとか、大分の名産、地元のカボスをかけて食べたりとか、地域の食や食文化を楽しんだり、食べる場があるということはお客さんにとっても、農家にとっても楽しいことです。

お客さんにとっては、来るお客さんにとってはすごく楽しい思い出になって帰ってもらおう。そしてそこに地元の人がいっている話ができるのがグリーンツーリズムの楽しみです。受け入れの農家の方も、「次は、こういう料理を出そう」「この時期は、山にこんな食材がある」といつも頭を働かせていました。しかも、すごく楽しそうに。

9. 宿泊施設数と宿泊者数の内訳と推移

大分の場合は、今現在、簡易宿泊施設の許可を取得している「農村民泊（通称農泊）」が、約70軒あります。

同じように、和歌山県でも農村民泊という施設が徐々に今増えてきています。平成18年

には施設の数も0軒だったのですが、それが3年ごとちょっとずつ増えているような状況です。平成30年には県内に許可を取得した家庭は、114軒になっています。

現在、和歌山県においては、「教育のため」に、学生さんなどを受ける場合は、許可についてはそれほどいわれないようですが、だんだんと農家民泊の簡易宿所の許可取得が、必要という流れになってきているようです。

こういった施設の許可を取得した場合、「業」となりますので、学生だけではなく、一般のお客さんと一緒に体験を行ったり、宿泊の受け入れが可能ということになります。

和歌山県内の農家民泊への宿泊者数も、最初（平成21年）は500人ちょっとぐらいだったのが、少しずつ増えています。また、関空や大阪・京都に近い和歌山県には、ここ最近、インバウンドのお客さんもすごく増えていますね。

10. 今後、和歌山県・関西に集客が期待できるイベント

こういった学生だけではなく、一般の方も、農村に滞在する流れは、日本全体でもおそらく増えていくと考えられますので、和歌山県に、そしてこの地域に来るお客さんも増えてくるのではないかと思います。

今後、和歌山県、関西へお客さんが期待できる見込めるイベントなどをあげてみました。10年以上前になりますが2004年には、紀伊山地の霊場と参詣道ということで、世界遺産・文化遺産の方に認定されています。都市部だけではなく、山間地域を、多くの外国人のお客さんが、リュックなどを背負って歩いていたり、地図を持って回っていたりすると思います。

お客さんが寄れる場所、宿泊できる場所ということで、もちろん従来のホテルや旅館、民宿もありますが、この地域の農家に泊まれる、地域の人と交流ができるということもこの地域を訪問したお客さんの楽しみになるかと思います。

またこれからのことを考えますと、来年開催される2020年東京オリンピック、2021年にはワールドマスターズゲームという、世界規模の国際総合競技大会が行われます。2025年には大阪の方で国際万博も予定されております。

これから国内だけではなくて、多くの訪日観光客の来訪もこの時点で分かっています。そのようなお客さんたちを、もちろん歓迎してもてなすということも大事ですが、その上で何かお店を作ったりとか許可を取ったりとか、この地域に来てもらって買い物とか宿泊体験・滞在することができる、そしてこの地域のファンになって、イベントがきっかけで足を運んでもらう。何年か経ってまた日本に行ってみよう、日本に来てから和歌山の方にも行ってみたいと、そんなリピーターになってもらう取り組みというのがこれからの地域で必要になるかと思います。

11. 情報発信と関係機関の連携

先日、知人が和歌山に遊びに来て、熊野古道を歩いてみたいというので、案内したので

すが、すれ違う 8 割の方が外国のお客さんでしたね。和歌山の山深いところで、すれちがうのは、日本人より外国の方が多いいぐらいいましたね。これからもますます増えていくのではないかと思います。

今後、グリーンツーリズムを取り組む際の課題について、幾つか述べたいと思います。一つは、来たお客さんにこの地域の良さをどのように PR、アピールするか。

やはり情報発信、遠くの方はパンフレットとかホームページとか、情報を見て来ますので、いかに情報を発信していくというのが大切です。もちろん情報が更新され、最新の情報が出ているということが必要になってくると思います。

そのためには、この地域に住んでいる方、昔から住んでいる方だけではなくて移住された方も含めて、この地域がこの地域をどのようにしていくか、あるいは魅力ある・訪れてみたい地域というのはどういうところか、地域について話し合う場というのは必要だと思います。行政だけではなく地元の方も含めて、農家の方だけではなく商売をしている方も含めて、いろんな世代の方、年代の方が入ってこの地域の良さってどういうところだろうということをお話し合っていくことも、すごく大事なことです。

先ほどの一つの円の図にありましたが、農家、加工グループ、観光協会、行政などの連携が大事になりますね。町に、どういうお客さんが来ているのか、何を求めて来ているのか、把握する必要があります。

また「情報」を一つの組織だけで囲ってしまうのではなくて、共有していくと風通しの良い街になり、お客さんが集まるのではないかと思います。

例えば、遊びに来て、お昼食べてからどっか行きたいという時に、それだったらあその場所に行ったらいいよとか、ここに行けばこれ買えるよとか、そういったことが町の中でやり取りをされていると、外から来た人も町に対する印象もすごくよいものになると思います。1人1人が、そのまちの看板になります。もし悪口など言うと、その場所に人が来なくなるだけではなく、町全体に悪い印象がついてしまいます。

私も昔安心院にいたときに、町の中で、あるいは温泉で、「あんた、どっから来たんね?」「だれ方んとこに泊まるんね?」と地元の人によく声をかけられました。「〇〇さん宅です」と話すと、「あ〜、あそこん方だったら、こっからすぐ近いでえ。」とか「お父さんが、おもしろい人でえ。」なんていわれると、なぜか旅人の私も嬉しくなりました。

自分たちのところだけでなく、地域の他の所の動きとか、話というものにも耳を傾けていくことも、また他の地域とも連携していくということも、これからのグリーンツーリズムの、あるいは観光などを PR する上では重要なことと考えています。

以上、グリーンツーリズムについて、概念的なことでお話をさせていただきました。続きまして、地域の中で具体的にどのように活動を進めていったかということについて原見さまよりお話をさせていただきます。

中山間地域を活かす一人こそが地域を創る一

日高川町 ゆめ倶楽部 21 前会長
原見 知子

はじめに

皆さんこんにちは。先ほどご紹介にありましたように、ゆめ倶楽部 21 現会長である山下さんの都合が悪くなり、前会長の私に話を依頼されました。山下会長は、すごく熱心で真面目でこのような会の約束を破る人ではありません。事情を聞いてこれは役立たずかもしれないが、私が受けるしかないと思われ急遽来させていただきました。

内容としては会長の思いを十分に伝えることができるか心配していますが、よろしくお願ひします。

まずこの資料に私の名前が入っていますが、これは山下会長が作ったものです。金曜日の夜にこれを持ってきてくれたのです。皆さん見えないと思いますが、この資料に手書きで会長の思いがきっちり書かれています。内容が漏れないようにお伝えできればと思います。

自己紹介と山下会長のこと

私は日高川町（旧中津村）で、家は林業をしています。この地域には2年程前、林業の林研グループで熊野川森林組合長の田中さんの山を見せてもらいに行きました。それ以前にはこの地域の川下りの船に乗ったり、また、「かあちゃんの店」にも行きました。今日は行けませんでした、また来たいと思っています。

山下会長は旧中津村（町村合併後は日高川町）の役場職員でした。中津村在職中に『ゆめ倶楽部 21』を立ち上げ、事務局としてゆめ倶楽部 21 に関わってくれました。創業者、事務局、地元民の立場で大変な努力をされながら、この会を支えてくれました。数年前に退職され、今はゆめ倶楽部 21 の会長職にあります。彼のゆめ倶楽部 21 に対する強い想いを活動内容に沿って説明させていただきます。

和歌山県日高川町の紹介

まず、日高川町の概要を紹介します。ちょうど和歌山県の中央部に位置しています。大阪から、車でも電車でも約2時間余りの所にあります。平成17年に旧川辺町、旧中津村、旧美山村の一町二村が合併して、広く横に長い日高川町となりました。日高川町の役場は御坊市の近くあり、車で20分程の中津支所、そこから15分程で美山の支所があります。地形的には日高川に沿って集落が形成されています。

皆さんのところには熊野川が流れていますね。熊野川は太平洋に向かって縦に流れていますが、日高川は紀伊半島を横に流れています。この日高川のもとで、平成17年に日高川町という新しい町が発足しました。

観光としては、和歌山県最古の寺である道成寺というのがあります。701年に創建されまして、浄瑠璃、能、歌舞伎で有名な安珍清姫の物語の舞台になったところです。場所は旧川辺町で御坊市からすぐのところにあります。また、毎年春に旧美山村で「みやまの里 ふじまつり」があり、長さ1,646mの藤棚は日本一です。4月の下旬から5月の中旬に、観光客が17,000人位訪れます。多い日は1日に3,000人が藤棚を歩いて楽しんでくれます。

これは鷺の川の大滝です。ハナジロの滝とも言われ、旧中津村時代には秋の紅葉祭りの会場にもなりました。

町の概要は、日高川町の人口は平成14年に11,767人、令和元年で9,822人となりましたが、注目していただきたいのは、人口は減っているのですが、世帯数は増えているのです。4,075世帯から、4,210世帯になっています。私たちの活動の結果であると言い切れませんが、日高川町役場と一緒に移住定住を目的に頑張ってきた成果ではないかと私は思っています。今後日高川町の人口減少が続いても2027年には8,900人を維持したいと取り組んでいます。

日高川町（中山間地域）の課題

中山間地域の課題として三つあげたいと思います。皆さんのところも、この条件に当てはまるかもしれませんが…。一つ目は、やはり「地域のコミュニティーの危機」です。日高川町は高齢者が多く65歳以上の高齢化率が40%です。人口が減って空き家もたくさんありますが、それを保全できないという状況に陥っています。次に、「耕作放棄地の増加」です。大きな要因として高齢化や鳥獣被害による農業生産意欲の低下だと思います。三つ目は「人材不足」です。これも人口減とともに、解決しづらい問題であると感じています。

ゆめ倶楽部の設立に至るまでの経過

山下会長は平成14年2月1日に「中津ゆめ倶楽部21」を設立しますが、そのきっかけとして、ファーストステージのタイトルとしていますが、平成6年にさかのぼります。山下会長は当時6年間、教育委員会にいました。その時、“社会教育”や“生涯学習の場”が活発に行われていました。まず「移住者囲炉裏会議」をつくりました。

旧中津村で、平成の4年頃から民間の方が菜園付き住宅というのを作りました。土地は借地ですが住宅は700万円ぐらいだったと思います。そこにお客さんを呼ぼうと行政が住宅の見学希望者に、菜園付き住宅の見学だけではなく村内を案内するようなバスを仕立てました。バスに乗った人の中には「菜園付き住宅はちょっと自分たちには合わないが、この地域は綺麗で落ち着くし、住みたいなあ」という人が出てきました。その後、自分たちでこの地域に移住し、家を建設しました。平成初期の頃は景気も良かったのか、今のように古民家を修繕するとかではなく、自分で家を購入したり、大工さんの力を借りずに自力で家を建てたりしながら、中津村にたくさんの方が入ってきてくれました。山下会長はその人たちを集

めて、「移住者囲炉裏会議」を始め、田舎でのより良い暮らし方や問題点を話せる場としました。この場で出た意見の具体例としては、特産農産物の再開発、稲作体験ツアー、間伐材の付加価値販売（ログハウスとか木工製品など）、UI ターンのリストラ者の農林業へ就労支援、また新規就農希望者向けのセミナーなどたくさんの提言がありました。これらは、後のゆめ倶楽部 21 に活動につながるきっかけとなりました。

もう一つは、「女性会議」です。中津村の生活研究グループ、農協、商工会等々の女性のグループに集ってもらい話したことがヒントにもなり、ゆめ倶楽部 21 を立ち上げようとの機運が高まったようです。

人間の生活基盤は一次産業であり、古来人間は農林水産業で生きてきた。農林業をおろそかにしてはいけない。農林業の基盤があれば災害があっても生きていける。会長は、地域への熱い想いと少子高齢化が進む現実に対し、21 世紀は農林業しかない、このままだと近い将来この村は大変なことになるという危機感があったのだと思います。

会の設立までの活動① 「観光イベント」の開催

では、そのために何をしたらいいか？少子高齢化の中で、耕作放棄地が村の農地の約 1 割を占めていた。これを維持するのにどうしたらいいのかと考えていたようです。

まず村を活性化しなければいけない。そのために観光イベントを始めました。筏アドベンチャーと名付け、昔の筏師に力を借り 4 メートルの木を 15 連繋ぎ、全長が 60 メートルの筏を作り筏流しの歌を歌いながら川を下って行く、昔の風景を再現しました。この様子は NHK の朝のテレビ番組で取り上げられ、「小さな村の大きな挑戦であり、涙が出るほど素晴らしいイベントだ」放映されました。

紅葉祭りは、秋に先ほどの鷺野川の滝へ続く道で開催したり、6 月にはホテル祭りを催し、村内外の人に楽しんでもらえるような企画を考えてきました。

会の設立までの活動② 中津ファンクラブの設立

山下会長は中津村以外で住んでいる中津大好き応援団に向け、『中津ファンクラブ』を開設しました。地元で産直の中津産品販売所があります。ファンクラブの年会費として 1,000 円いただき、それで商品券を作り、中津産品販売所の品物が買えるようにしました。ファンクラブの人は、大好きな場所に行って産品販売所の物が買える。地元民は農作物が売れるという相乗効果により、この取り組みに 700 名近い人が加入してくれ、すごい反響がありました。

ファンクラブの人はゆめ倶楽部 21 設立後も、会のイベントに参加してくれ、困難な集客を助けてくれました。

イベント参加と産品販売所の買い物をセットにし、二つの楽しみを用意したことでお客さんも増えていきました。村に足を運びたいくなる仕組みを作ることは、人集めにとって重要

なことだと思えます

会の具体的な活動③ 受け入れ協議会の設立に向けて

ある日、山下さんが家に来て、「こんなのやるけど、入ってよ」と言われました。でも正直、説明を聞いても私には何をするのかわかりませんでした。

町の人に来てもらい、田舎の人と交流しながら田舎体験をしてもらうことでお金をもらう。私は毎日、田舎暮らしをしており、それがお金になるなんて想像できませんでした。

でも、なんだか面白そう、やってみようかなと設立当初からの会員です。実はちょうど子育ても一段落したときで、県の「女性アドバイザー」の仕事を引き受けたり、「わかやま女性100人」事業などの仕事をしてきて、地域づくりなどには多少関心がありました。

ゆめ倶楽部 21 設立と多様な参加者

会員は27名で、この中にIターン者が1/3、あとは地元民で主婦や各グループで活躍している女性、あるいは森林組合や農協の職員等で構成されていました。

名称は『中津村都市農村交流推進協議会』ですが、通称名として「ゆめ倶楽部 21」となりました。

活動のテーマは「体験から交流、交流から定住へ」と決め、体験型観光から始めました。体験に来てくれた人が地元の人と交流し、その後定住して中津村民になってもらう。壮大なテーマの元、会議は夜の7時から10時半ぐらいまでかかったこともあります。

それぞれの意見や思いが錯綜したり、脱線したり…。言いたい放題でも、後々どこかで着地するのです。そんなしゃべり易い雰囲気は長時間に及んでも、参加してよかったと満足感の得られる会議でした。会員同士は、Iターン者と地元民が協働で目標に向かっていくので、よそ者扱いはなく地元を盛り上げる集団となりました。

Iターン者の長年培ったスキルは、都市との交流を目指すゆめ倶楽部 21 の大きな戦力でした。また、イベントの開催時の集客は、Iターン者の元職場や前に住んでいたところのご近所さんに案内できるので、広報に係る費用も抑えることができました。

ゆめ倶楽部 21 の活動の中で、Iターン者は地元の方と仲良くなり、地元民も都会から来て一生懸命に農業をしているから、うちに休耕田があるから使わないかと話がまとまることもあります。ゆめ倶楽部 21 を通じて移住して来たが、活動の中でいろんな方と繋がり、いつの間にか長年暮らしてきた人のようになっています。

教育旅行の受け入れへ

そのように活動をしている中で、教育旅行の受け入れを始めました。

学校等から子ども達に来てもらって、藁草履づくり、下駄づくり、木工大工、竹細工、草木染め、押し花マグネット、ウッドバーニング、備長炭風鈴、クリスマスリース、早なれ寿

司作り、そば打ち、餅つき、豆腐作り、田植え、間伐などの体験をしてもらいます。

当時は 22 個ぐらいのメニューを中心に自分たちで考え、地元の方にも協力をお願いしました。受け入れの場所は、中津にある「ふれあいドーム」です。多目的ホールで、団体のお客さんや教育旅行の子どもたちが来た時に、ステージの上に荷物を置いて、その下でいろいろな体験をしています。広いドームの中でいくつかの体験ができ、目が行き届くので先生方に喜ばれています。

軌道に乗り始め、自信も少しついてきた頃、「ちょっとぐらい儲けよら！」とか、「少しお金が入ったほうが、やる気、生きがいが出るのではないか」という声が出て、少しずつお金をもらうようになりました。

農家民泊の取り組み

平成 20 年度から、小学生を対象にした「子ども農山漁村交流プロジェクト」がスタートし、ゆめ倶楽部 21 も取り組みました。1 軒に小学生が 3~5 人泊り、受け入れ家族と食事づくりや体験をします。

家族と離れて見知らぬ家での宿泊のためか最初は緊張している子ども達も、次の日はニコニコ顔で緊張感も取れ、家族のような雰囲気が漂っています。

たった一泊、一緒に食事をして過ごすことで人の距離がこんなに縮まるのかと感動します。

インバウンドの子どもたちの受け入れ

日本の子供達を受け入れていく中で、インバウンドの受け入れも始まりました。おそらく和歌山県でインバウンドを初めて受け入れたのは、日高川町の旧中津村だと思います。

初めてのお客さんは、韓国から体験型観光の視察に来た大人の団体でした。この団体はいくつかの地域に依頼したが断られ、ゆめ倶楽部 21 に連絡したようです。

山下会長は NO と言わない人です。「はい、分かりました」と受けました。そう答えたものの、言葉の通じない人とどのように接していくか、受け入れ農家がいるのか等、心配したようです。受け入れ農家は、山下さんが言うのだからと協力してくれました。

付き添いの方は、一般宿泊施設に泊まります。この韓国の団体は大人だったので 1 軒に一つ携帯電話を持たせていました。通訳は一般宿泊施設で、問題がおこっていないか、電話が来ないかと心配しながら待機していたようです。電話は 1 件のみで、その内容は、ご飯の前にお風呂へ、と言われたけれどパジャマで食事をして失礼ではないのかということでした。「言葉が通じない」とか「やり方がわからない」とかの連絡はなかったそうです。

見よう見まねやジェスチャーで相手に気持ちを伝える。相手が自分たちにおもてなしの気持ちをもって接してくれることが通じれば、泊り客が日本人であろうと外国人であろうと同じなのだを経験した事例でした。

苦勞しながらの取り組みの結果、今、日本人よりインバウンドのほうが多くなりました。

受け入れ体験メニューについて

体験をしてもらって一番嬉しいのは、皆さんに喜ばれ、帰るときに「良かった！」と言ってもらえることです。体験でお金をもらう限り、私達インストラクターはよりメニューのブラッシュアップに努めなければなりません、それがやりがいに繋がります。

右下のスライドの写真は、苔玉作りです。インストラクターのおばちゃんはこのために資格を取り、みんなに作ってもらっています。今、人気の体験メニューです。

初年度 864 人だったお客さんが、平成 30 年度現在では 1,821 名になり、累計すると 39,074 人になります。体験の料金は、一人大体 1,500 円から 2,500 円で、この人数を受けています。

体験を受け入れる際の料金システム

体験料金は、インストラクターが各自で料金設定し、受け取った 1 割を事務局に手数料として渡します。例えば、1500 円の体験料金ならインストラクターは 1,350 円×人数分、事務局には 150 円×人数分が入ります。事務局はそのお金でインストラクターのお弁当や道具を買い、体験がスムーズに行えるように手伝ってくれます。

近年の受け入れる子どもたちの傾向と受入家庭の状況

農家民泊のお客さんは、国内で初年度（平成 20 年度）54 人から、平成 30 年度で 34 人と少なくなっています。海外の方は、平成 30 年度、93 名を受け入れています。

ホストファミリーも、最近では外国人の方がいいよという人もいます。

受け入れ家族によっても「女の子の方がいいよ」とか、「男の子の方がいい」という人もいます。女の子だと、ホストファミリーは、隅々まで掃除ができてないと思われなかと。また、女の子の方が手伝いや気遣いができるという人もいます。

ホストファミリーの一人が言いました。農家民泊をやり始めたことで、「家に居ながら世界がみえる」と。なかなか海外に行く機会もない中で、外国に行かなくても外国人と交流出来る素晴らしい機会なのです。

地域と大学との連携による地域振興の取り組み

地域の人口問題を取り組むなかで、山下会長は大学の知識を地域に活かさないかと、平成 15 年に和歌山大学経済学部の橋本教授に面会を申し入れ、教授からいろんな助言を受けました。教育機関との連携により都市住民を受け入れるシステムを構築するための方策を探るため、おもてなし（ホスピタリティー）の心とかオンリーワン発想、腰の据わった交流、マーケティングの調査をもっと頑張ったらどうかなど提案を受けました。

その後、大学との交流を行い、大学の文化祭に参加させてもらいます。中津村の特産でホロホロチョウというキジ科の鳥がいるのですが、その焼き鳥を大学祭で出店したらすぐに売れたようです。村内に少なくなった若い学生さんとの交流は、個々の活動力に繋がったように感じます。

異なる年代との交流や学生の研究発表の機会

滞在型観光の推進に関する調査を、アンケートを作り集計し、それをまとめて卒論にしてくれた学生がいます。せっかく卒論で研究してもらったのだから、是非地元で卒論発表会をして欲しいと提案しました。和歌山大学初めての学外卒論発表会は若さ溢れる内容で私どもは新たな気づきをいただきました。

その後、民泊を通じて大学との交流が増えました。和歌山大学の藤田先生のゼミ生がモニターとして来村し、私たちが取り組んでいる体験に参加してくれました。お客さんがどのように感じているか、私たちは学生を通じ知ることができました。また、新しい目線での意見は重宝しました。

ゆめ倶楽部 21 が交流してきた大学は桃山学院大学、京都光華女子大学、和歌山信愛大学などです。各大学の学生と交流を持つことにより、過疎の村で若いエネルギーをいただくことができました。農家民泊のおじさん、おばさんは学生さんと未だに交流があるといいです。何かに取り組む時、自分たちと違う年代の人が地域に入ってくれることの重要性を痛感しました。

田舎暮らしの取り組み

移住者が少しずつ増えていく中で、平成 19 年に県の田舎暮らし推進事業を受けました。県内の他の市町村と一緒に取り組む中で、平成 26 年の移住者が 4 世帯 5 人、平成 30 年には 8 世帯 18 名になりました。

日高川町役場に定住促進室ができ、移住者の取り組みを積極的にやっています。私たちは微々たる力かもしれませんが、一緒にやることによって若い方の移住者が増えてきています。

私たちが取り組み始めたころは、定年後にまず男性が、田舎暮らしがしたいと移住してきます。女性は町で仕事や趣味を活かしたいと残ります。最初に男性だけですが、休暇中に行ったり来たりしているうちに奥さんも引き込まれて、田舎で一緒に暮らすようになるケースがありました。

これは二地域居住といい、二つの地域を行ったり来たりするのです。私からみれば羨ましい環境だなと思います。最初に申しましたように、日高川町は大阪から車でも電車でもだいたい 2 時間あまりのところであり、二地域居住をしやすい場所だと思います。

今日こちらに、田舎暮らしの移住を専門にされてきた紀美野町役場の元職員西岡さんが

来られているので、あまり偉そうなことは言えませんが…。紀美野町は大阪や海南市、和歌山市に近く、便利で仕事場もたくさんあります。今住んでいる環境からあまり変えたくない移住希望者は比較的行きやすいのかなと思います。

また、移住者がパン屋さんやレストランなど起業をしている人が多いように思われます。一方同じ頃に移住の受け入れを始めた古座川町にも行き、I ターンの人に色々話を聞きました。「古座川町に移住してこようと思ったら、覚悟が必要だ」と。ここに来たら絶対町には戻らないと言う覚悟の元に来なければいけない。その覚悟について、すごく楽しそうに話すのです。どうしようもない覚悟ではなくて、そのことが、その人にとってとても良い選択をしたような感じで言われていました。

一方、日高川町は都市部にやや近い田舎なので、両方で住んで移動できる範囲であることから、先ほど言った二地域居住の条件に当てはまるのかなと思います。

移住というのは、その人にあったところにしっかり根を張って移住してくれることが、一番良いことであり、地元で溶け込むことが一番大事だと思っています。

新規移住者が始めた「お米作り塾」の話

日高川町に移住してきた方の話をしたいと思います。この方は都市部の大手企業を退職され、田舎で魚釣りやゴルフがしたいとゴルフ場の真下に引っ越して来ました。悠々自適生活のはずが、田舎では定年直後は若者扱いだと知りました。また、ゆめ倶楽部 21 入会后、忙しくなりました。私達会員は、この方から商品化や販売するときの注意点等々教わり、ゆめ倶楽部 21 の活動に影響力を与えてくれました。

この方の隣に住む農家のご主人さんが亡くなり、奥さんから「耕運機も田んぼも全てあるから、米を作ってほしい」と言われました。耕運機を借りて田んぼで耕してみたら、すごく気持ちがよく、鼻歌であろうと大声で演歌を歌おうと耕運機の音でかき消されるので、こんな解放感はないと思ったそうです。

この解放感を町の人に知って欲しいと、「お米作り塾」を開催しました。米作りの種まき、田植え、草を取り、稲刈り等々に 6 回参加します。その体験料金は一家族 2 万円です。高いと思われるでしょうが収穫後に、卒業証書とお米一袋 (30Kg) くれます。汗水と共に自分で作ったお米です。

体験型観光からみられる自主的な活動の拡がり

体験型観光や農家民泊で、自分の手で作ったものがどんなものより美味しいと感じる。この感覚を知ることが大事なことだと思います。自分が植えて育てたお米や野菜は、嫌いな人でも食べられるようになる。もちろん自分が作ったので、安心安全であることもわかるからでしょう。

この「お米作り塾」では、収穫したお米に『あやめしぐれ』というブランド名を付けてい

ます。これは、中津村が生誕地である歌舞伎役者の『初代吉澤あやめ』から取り名付けたそうです。それで売り出したら、この方が家で食べるお米も無くなるぐらい売れたというのです。この方が始めたのですが、何人かのIターン者も協力しています。

この取り組みは、3~4人家族が年間5~6組来てくれ、お昼ご飯、作業後の温泉施設使用、産品販売所での買い物などでも貢献してくれます。また、収穫したお米を持って帰り、近所の人に「これはわしが作ったんや」とお裾分けすると、「おいしいけど、私は行けないから買ってきて」と言われる。

この方の食べるお米がなくなるのは、このような経緯があるからです。地元の農家では考えつかない流れを作ったのは、町の人だからこそ、このようなやり方が構築できたのだろうなと感じました。

移住者を受け入れた際の地元側のメリット①

Iターン者を受け入れたメリットは、幾つか考えられます。まずは、集落を立て直せることです。中津村当時、水道は簡易水道と言って谷から水を引いていました。谷の上に水を貯めてろ過するのですが、やはり清掃が必要となります。高齢者が多くなり、高い所に行けなくなった時、Iターン者に白羽の矢が立ったそうです。

その時、山下さんは言っていました。「普通お水って生命の元ですよ。そこをよそから来た人に一任するこの関係性は、Iターン者が地元を馴染んだという証拠じゃないか」と、すごく感激して私に話してくれました。

同じ頃、土葬でした。葬儀一連のしきたりは高齢者が亡くなっていき、子供たちは他所に住んでいるので知る人が少なくなりました。その集落に、Iターン者で何事にもメモを取るきっちりした人がいました。移住して数年後、葬儀やお祭りなどで重要な役目をはたしていました。移住者のスキルを活かすこともメリットですが、地元民として活動してくれることが活性化に繋がっていると思います。

移住者を受け入れた際の地元側のメリット②

「空き家の保全」について古民家に住むことによって保全に繋がります。また、空き家は治安上の問題もあります。資料によると、町の耕作農地が2haくらい、移住者のおかげで増えたと書かれています。地方交付税も、一人約20万円加算されるようです。

移住者側のメリット①

移住者側のメリットとしては、当初は定年後の人が多く「定年後の生活が充実する」「スローライフの実現」「耕作による楽しみや食の安全安心に取り組める」などです。

就農の際の基本的な農業技術の取得は、車で30分ぐらいのところ、就農支援センターがあります。県の施設ですが、ここで農業を行いたい人に技術的な知識を教えてくれ、実習も

できます。就農支援センターは農業技術を身につけ、研修者同士の交流の場となり友達の輪が広がります。人と人との温かな交流が生まれ、地域づくりへも参画していきます。

移住希望者用の長期滞在施設とワンストップ窓口

また、人と人との温かな交流が生まれます。地域づくりへも参画していきます。

町内に、風呂谷ビレッジと言うログハウス調の家があり、1泊素泊まり 3000 円、1ヶ月 2万円プラス光熱費で宿泊できます。ここに寝泊まりし、地域の様々なところで農業体験や林業体験をすることができます。

地域のことを知るためにも、長期の滞在が可能な施設があれば、その地域の良いところも悪いところも見聞きすることができます。また、季節の違いも感じ、気象条件も知ることができます。短期滞在では体験できないことが長期滞在ではクリアすることがあります。この施設の柏木オーナーは、自分のところに田畑を持っていますので、一緒に農業をやりたい人の手助けをしています。

滞在型として日高川町の一番奥に「てんこそら」があります。林業の関係者の施設ですが、町が借りて長期滞在者が利用できます。

皆さんの地域にもあるかもしれませんが「ワンストップパーソン」の設置です。県内いろいろなところで窓口として、移住希望者に情報を提供したり、空き家案内をしてくれます。

アグリビジネスの創出① NOと言わない事務局の話

アグリビジネスの創出ということで、2つ考えています。一つ目が、今後の展開として「農家民泊の受け入れを拡大していかななくてはいけない」ということです。二つ目は「移住推進」ということで田舎暮らし希望者をもっともっと増やしながらか、お試し滞在をしてもらうということ。これらに重点におき、まだまだ躍進することを願っています。

今日、山下会長の代わりに来たので、山下会長について少しお話しさせていただきます。

先ほども言ったようにNOと言わない人なので、まずいろんな体験とか農家民泊のお客さんからの要望に「はい」と答えます。

承諾してから後に、色んな所に声かけをして、「悪いけどこの日ちょっと何とかしてくれないか」とお願いし、前へ前へと進めていく人です。それはお客さんに「NO」「できない」といってしまったらその人の行きたい気持ちが失せることを知っているからだと思います。

事務局としての山下会長の凄さは、ゆめ倶楽部 21 設立当初ですが、会議の前にたくさんの書類が家に送られてくるのです。そこにいっぱい質問が書かれてあり、大きな枠を設けて、このことについてどう思う、あのことについてどう思う等々、何ページにも渡って送られてくるのです。私も送ってくるものに、自分の意見を書きます。次の会合に行くとみんなの意見が打ち込まれて、無記名でしたが、それぞれの考えが提示されています。それを叩き台にして話し合いをするから、盛り上がるのです。会議に呼び出されて行くのではなく、「目

的を持って参加させる」方式は、山下さんにとって負担が大きく、寝る間も惜しんで会員の意見を打ち込んでいるのではと心配しました。でも、その熱意で会員がやる気を出したのだと感じます。

最後のエピソードは、設立当初は体験型観光の補助金を受けながら行っていたのですが、2年ほど経過した後、補助金が切れたのです。

普通、補助金が切れたらどうします？ 続けるっていう人は少ないのでは？

山下会長が「補助金が切れるのですが、どうしますか、活動を続けますか？」と問うた時に、ゆめ倶楽部 21 の会員は、「やるやる！」と言ったのです。私も言いました。これだけみんなが仲良くなり、生きがいにもなっていました。

しかし後で考えたら、私たちが続けるといった後で山下会長は頭を抱えたでしょう。補助金はない、でもみんなはやる気満々という状況です。

彼はすごいと思います。そのあと、田舎暮らし支援事業を受けてきたのです。田舎暮らし支援事業の補助金をもらい、新たに移住に取り組んだのです。その後、さらに農家民泊の事業も受けました。

様々な会員のやる気を抑えるような方式じゃなく、何かやりたいという声を十分にいかしてくれる事務局だったと思います。これはなかなか難しいことだと思います。

行政は今、もっと大変な仕事があるのかもしれませんが。これだけやってもらえるということが困難な時代にいるのかもしれませんが。けれども私たちは、当時一生懸命地域のために動いてくださった山下会長のおかげで、今日のゆめ倶楽部 21 があると思っています。

アグリビジネスの創出② ブランド商品の創出

こちらの地域の資料を読ませてもらったら、ブランド商品を作るといような話が出ていました。

これから話すことはゆめ倶楽部 21 の活動とは全く関係のない話なのですが。

日高川町の美山地区でイタドリ（ゴンパチ）の使った“ごんちゃん漬”があります。最近、鹿の被害等で、イタドリが少なくなってきました。そこで、林業試験場が研究を重ね、立派なゴンパチが取れるようになりました。

少なくなったイタドリを増やすだけではなく、林業試験場は別のところに依頼し、イタドリの成分を調べてもらったのです。するとイタドリの中には、皆さんが健康のために飲む特茶に入っている成分とよく似たものが見つかりました。ポリフェノールも多く入っており、花、茎、皮等すてるところがないようです。

最初はイタドリを増やすことが目的だったのに、研究によって新たな効能がわかった。

私は新しいことを始めるときは、いろんな人（異業種）と共に取り組むことが大事だと思っています。従来のやり方を保守していると新たな展開には繋がらない。

これがゆめ倶楽部 21 に参加して得た私の考え方です。限界集落にじぶんも加担する立場

になりましたが、気持ちは前向きに取り組んでいきたいと思っています。

運営事務局について

運営事務局について、先日、私たちの「ゆめ倶楽部 21」と印南町の「かえるの宿」と合同で、奈良県の明日香村の大和飛鳥ニューツーリズム協議会を視察してきました。そこはたくさんの方を受け入れているので、色々と気付かされたのですが、そこで私が一番びっくりしたのは、事務局が商工会だったことです。私達は事務局を行政の方をお願いして日高川町に助けてもらっていますが、農家民泊等々は商業という面もあるので商工会の事務局というのも有り得るのかなと感じました。

こちらは JA が事務局だと聞いていますが、やはり事務局の方がどのような目的を持って、やるかということで、その会の方向性も変わってくると思います。こちらはすでにできているので不要かもしれませんが、少し紹介しておきました。

人こそが地域をつくる

最後に、このことは山下さんが一番伝えたかったことだと思います。

即戦力のある「造花」よりも…人と人とが苦しみながら、育てた「花」が良い。「人こそが地域を創る」

これは NHK の『クローズアップ現代』の中で大林監督が言われた言葉だそうです。

平成の時代でしょうか、今から 22 年前に地元の日高中津分校が、分校で初めて甲子園の選抜に出場しました。分校が甲子園に行くということで、テレビ局などが取材に来てくれました。NHK に取り上げられ、大林監督がこのような話をしてくれたということで、山下さんにとっては、造花よりも花、自分たちが今プランとしてあげている体験は、実際のありきたりな花よりも、もっともっとみんなの汗と血が滲んでいる、そういうものがないんじゃないかというようなことを感じながら、彼はテレビ放映を見たのだと思います。それで最後にこの言葉を付け加えているのだと思うのですが。

肉体は歳を重ねると衰えていきますが、思い出は増え、積み重ねていく時間そのものが心の宝を高めていくと思います。新しさやスピードが求められている社会にあっても、時が作り出す価値に心を寄せるゆとりを大切にしたいと思います。

そんな体験型観光や農家民泊を展開していきたいと願っています。これが彼からの皆さんに対するメッセージだと思います。長々とおしゃべりしました。ありがとうございました。

質疑応答(意見交換)

○司会者：辻和良（座長：食農総合研究所 都市農村共生研究ユニットリーダー）
有難うございました。続けて、質疑応答・意見交換を行っていきたいと思います。

○Aさん

原見さんの話の中で、年数がファーストステージと書かれていたのが確か平成6年11月から12年11月ってなっているんですね。で、次立ち上がった時が14年ってなっていて、この間少しなんか飛ぶのですが、何か理由があったのですか？

○原見氏

これは多分、ファーストステージというのはこのゆめ倶楽部21を発足するにあたっての助走期間のような形です。この時、山下会長はこの6年間は教育委員会にいたのです。

その中で先程話したようなことをやりながら、ご自分の中に、ぼんやりかはっきりかわかりませんが、何かをやらねばこの村は駄目だという意識が芽生えたのだと思います。それだけではなく、移住者の囲炉裏談義や女性会議等々で、様々な皆さんの要望を取り入れていったのだと思います。私が言いそびれたのかも分かりませんが、平成14年の立ち上げの時に山下会長は、中津村の産業振興課に異動したのです。その課で、ここでやると観光とか地域づくりが実際にできるのではと、この「ゆめ倶楽部21」を立ち上げたようです。

○Aさん

わかりました。有難うございます。

○Bさん

この「てんこそら」っていうのは何ですか？

○原見氏

「てんこそら」というのは移住のための短期滞在施設です。もう一つ風呂谷ヴィレッジというのもあるのですが。移住したい人が実際に1日、2日来ただけでは判断できないので、長期に宿泊できる場所が欲しいと。その場合、民間では少し値段が張るし、この地域に民間の宿泊所が少ないこともあり、「てんこそら」でその地域を知り、馴染むような宿泊が目的です。

○Bさん

ちょっと聞いたことがない名前だったもので。設立の趣旨はよくわかるのですけれども。

それともう一点、質問があります。ゴンパチ、イタドリの花ってどのような形で加工してお茶にするのかなと思ひまして。

○原見氏

私も友達がやっているので話を聞いたところ、何もしなくていい、干して乾燥させ、その乾燥したのにお湯を注いだらいいそうです。林業試験場の成果発表会が、毎年2月頃あるのですが、その時にゴンパチのお茶が出ます。みんなに味わってもらいながら、ゴンパチの使い方を知ってもらおうようです。

○Cさん

貴重なお話をありがとうございます。熊川町の東で田んぼをやっているササノと申します。熊野で農家民泊に従事しているのですが、移住者でなかなか忙しいですね。兼業農家的なこともあって、そういった自分の農家としての生業あるいは兼業で現金収入を得ながらの他のお仕事とかと並行して、農家民泊や農業体験とかもやっていると、ちょっと手が回るのかなという不安もあるのですけれども。この辺を実際にやってらっしゃる方に、どのようにクリアしていらっしゃるのかなあと聞いてみたいです。

あと、先ほどの稲作、田んぼ塾のことを聞いたら気が遠くなって来たのですけれども、それが一つと、植田さんなんかは単身で実際に事務所というか、グリーンツーリズム、そういうことをやってらっしゃったということで、先ほどのゆめ倶楽部21の方でも事務局が非常に大きな役割を果たしてくれたということなのですが、事務局の実際にどういう風にそういったことを立ち上げて行って、地域を、ここでいったら熊野川町って結構、僕らの小口地区ですと、かなり広い地域になっているので、その辺をどういう風に連携してやって行ったらいいのかちょっと伺いたと思います。

○植田氏

安心院の場合は、農村民泊というのを1996年から始めているのですが、あくまで農業を支えるための副業としての農村民泊ということで行っていたので、農業が忙しいシーズン、農業の稼ぎ時、例えば安心院はブドウの産地なのですが、7月後半から、8、9、10月の前半まで、農家は忙しいので、その時は本業に専念してもらう。それ以外のオフの時としてグリーンツーリズムの受け入れということで、副収入ということでやっている農家さんが多かったです。大分県の安心院の場合は、60件ほど受け入れ家庭があるのですが、その中でも専業農家って1割か2割なのですよね。後は兼業の方なので、やっぱり専業農家は農業が忙しくなると、その時は農業でしっかりと稼ぐと言うか、頑張る、それ以外のオフの時に副収入として、農泊に力を入れる農家が多かったです。副収入で近くのスーパーに働きに行くという選択もありますが、農泊では、実際に、お客さんに来てもらって交流しながら収入

を得るといことで、副業で農村民泊をやっている方が多かったです。

また運営事務局の話ですが、安心院町グリーンツーリズム研究会が1996年から立ち上がった当初は、会長の自宅を事務局にして、色々と会長自身が携帯でやり取りしていたのですが、負担も大きくなり、忙しくなってから、その後2004年に、NPOの専属の事務局というのをもちまして、そこに学生を卒業したての私が事務局に入ったのです。

当初は人を雇えるほどの財政力というのが研究会になかったもので、行政の持っている施設の一部を、研究会が委託管理する形で一部貸してもらって、そこを事務所にして給料もそこから少し出るというような形で、何年かやっていました。ただ2005年に合併を経て、町単独の判断でそういうことができなくなって時に、事務局の体制が色々変わりました。

私が雇用された時から専属の事務所ができて、同時にNPO法人の法人格を取得し、2019年現在は、常時3名のスタッフが研究会の事務局にいます。また、事務所も当初は委託管理や民間から借りて使用していましたが、現在は新しく建設し、活動をしています。

それまで町の一部を借りるとか、指定管理を受けるとか、いろいろなやり方もやっていたのですが、どうしてもトップの考えが変わると、情勢が変わってしまい、それに翻弄されてしまうということがあったので、自分たちで自立していかなければ…という方針で進んでいます。事務所の建設においても寄付を受けたり、銀行からお金を借りてやっているような状況です。

研究会事務局の収入としてはですね、修学旅行などの教育旅行の事務局手数料や視察研修等が大きな収益となります。ただ、まだ家族を十分養うほどの収入には至っていないと思うので、事務局の方達も色々考えながらやっていると思います。

○Cさん

伺いたかったのは、そういった町の地域ではない人たちが入ってきて、どうやって地域をつなぐような具体的な作業があったのかなと？

○植田氏

安心院では農村民泊とって、普通の家庭でやっているの、最初私は学生の時に卒業研究で入ったのです。各農泊家庭に最初、泊まり歩いたという、家の中に入って泊まって話を聞くというところから知ってもらって、自分の事も知ってもらい受け入れ家庭や安心院の事を知ることからスタートさせました。農泊受け入れ家庭は14軒中、10軒に泊まり歩きました。

また安心院町グリーンツーリズム研究会では、その当時、2ヶ月に一回、会員さんや町内外の方に集ってもらい、研修会・定例会というのを必ずやっていました。その時に、研究で訪れていた私なんかも参加させて頂いて、今学生でこういったグリーンツーリズムの話聞いていますというような紹介をしてもらい、皆さんに知ってもらいましたし、私も人を

知りました。オープンな会だったと思います。こういう定例会があり、町の外の人も入りやすい雰囲気だったというのが、安心院町グリーンツーリズム研究会が10年近く続いている理由の一つでもあるのかなと思いますね。

○Cさん

ありがとうございました。

○司会者

原見さんどうですか？ゆめ倶楽部21の事務局として、何かの役割とかそういうお話も事務局の話とかだったと思うのですけれども？

○原見氏

そうですね、事務局は私の所は先ほども話したように、山下さんが役場職員として作ってくれて、それをずっと引き継いでくれました。どことも同じだと思いますが、公務員の方は部署が変わられるので。これはちょっと恥ずかしい話かもしれませんが、一時期山下さんは産業課から農業委員会に変わりました。そこで山下さんは、自分の部署の人にゆめ倶楽部21の事務局を引き受けてくれないかとお話をしたらしいのですが、誰も受け入れてくれなかった。多分そうだと思います。私達の取り組みは、土日がありません。公務員の仕事は、真逆とまでとは言わないけれども、そういう位置にあると思うので、山下さんはゆめ倶楽部21の事務局を持ったまま農業委員会に行ってくれたのです。先ほどお話ししたように、川辺という御坊市に一番近い左端のところに勤めながら山下さんは、真ん中の中津村に通ってくれながら、ゆめ倶楽部21の事務をしてくれました。その後、役場の方で事務局として職員を配置してくれたり、地域おこし協力隊やパートの人が入ってくれたり、いろんなパターンを経過しながら今に至っています。

○植田氏

安心院の場合も民間の農家の人たちが研究会を立ち上げたのですけれども、やっぱりその当時の安心院の行政もグリーンツーリズムの推進係を設置するなど、応援する姿勢をとっていたというのは大きいと思いますね。教育旅行で来る多くの学校さんなども、行政が関わっているということで信用度が増したということがあると思います。ただ、その応援というのはずっと続くわけではないので、関係をつづけながら最終的には自分たちでやるという意思があったので、現在そういう方向になっています。

○司会者

それでは変わって、どなたか後ろの方で手を挙げられた方。

○D さん

山本と申します。貴重なお話ありがとうございます。グリーンツーリズムの中でちょっと気になる場所があったのですが、グリーンツーリズムにおける成功例や課題はおっしゃっていただいたのですけれども、その中でも失敗例は？デメリットについてちょっとお聞きしたいなと思います。ちょっと調べたのですけれども、失敗というのがあまりなかったもので、実際に全て成功してきたということですかね？

こんなことがトラブルになったとかそういうことはないですか？

○植田氏

失敗かどうかかわからないのですけれども、やはり、何でも、ボランティアだと続けるのが難しいとは思いますが。ボランティアではなくて、ある程度お金をもらうようにしたのですね。例えば安心院の農村民泊も最初から一泊二食を出していたのではなくて、一泊朝食だけ農家で食べてくださいと、夕食は町内のレストランを使ってくださいとやっていました。一泊泊まって、朝はいつも農家さんが食べているご飯とか味噌汁とか漬物とか、それぐらいでいいかなと開始したのですけれども、それでお金をもらうことに、法律的なものもあったのですが、それで当初はお金をもらうということに抵抗があったので、一泊朝食で3000円とか、それぐらいだったのですかね。農家の負担は軽くなりましたが、だけどあまりにも安すぎるというか、それだったら続けていきたいとか、特に関わる女性たちがこれだったら自分たちが手をかけたぶんだけやりがいがあるという風にならなかったもので、料金設定を再考しました。その後長く一泊朝食で4500円、夕食は1500円でやっていました。今ちょっと値上げをしているのですけれども、料金設定というのは最初慎重に考えますね。こんなことで、そんなに貰えないとなってしまうのですけれども。農家の人は体を張って体験を提供していますからね、体験も料理も。

そして、やるからにはちょっとでもお金が自分のところに入ると、農家の人も頑張るということになるので、また次もがんばりたい、と思える料金設定にしています。

○原見氏

失敗例になるのか分かりませんが、私たちも17年ほどこれをやっていると、高齢化してきます。もともと高齢地域なので、どのように後継者を作っていくかすごく大事になっていきます。例えば私は体験型のいろんなことをやっているのですが、自分と同じようなことができる人に、一緒にやってもらって、次から次に一つの体験が続けられるようにしたいと思います。

例えば日高川町でウッドバーニングの体験をするとき、インストラクターが高齢でやめると言うと、次からそこに体験の注文がこない。お客さんがそれをきっかけに他の体験も断

ろうかなとなると困るので、後継者作りが重要なと思います。

もう一つは会員の意識の問題だと思います。「よーいスタート！」でやり始めた時には、ものすごく熱量が高いのです。一生懸命やるのです。先ほども言ったように、ものすごく議論を戦わせても、目指しているものが一緒だったら、言い合いをしても良い方向に向くのですが、会が定着してくると、一人ひとりの意識がずれてきた時に、どのような方向性でいくのか難しくなります。

一つの例としては、自分は農家民泊をする時に、お客さんとコミュニケーションを大事にしながら損をしない程度でいいと思う人と、受け入れ農家を増やすためには、若い人に声をかけたいが、若い人ってそんなにボランティア的なお金でやっていくと生活が出来ないと言うのです。

気持ちの違う人たちが集まって、ちょっと方向性が見えなくなると、本当にやりたいのは何って思います。お客さんとのコミュニケーションを大事にするっていうことが見えにくくなることがあります。継続することと、みんな慣れっこになって気持ちが少しずつ変わってくるのをどのようにするのか難しいと思います。

○植田氏

安心院でも実は一回方向性の違いから研究会が分かれている経験があります。もともと農家の人たちが92年に立ち上げたのですが、農家だけで農村のことを考えていたのですが、そうなるとう忙しい時期が重なったりなどと、農家の人でも考え方が違うということで、同業者同士だとなかなかうまくいきそうではいかなかったのですよね。それで、96年に「農家だけ」の集まりを取っ払って、農村全体の集まりということで再スタートして、農家だけじゃなくてそこに商工会の方とか学校の先生とか、年配の人だけでなく若い人も入れていったと言うことで、いろんな年代層とか職業とかを入れていってもう1回作り直したというような経緯があります。また安心院の場合は、いろいろな問題が発生した時に、一つの大きなシンポジウムをするということが何度かあります。それで皆さんの意識を外に向け、気持ちをひとつにすることでクリアしたというようなことがありましたね。例えば安心院は稲作が盛んで、米どころだったんですけども、薫の文化を使った薫こづみ大会という、皆で薫を積む大会をしたり、地域の食材を生かしたスローフードフェアというのをして、皆さんの気持ちを外に向けて、お客さんに来てもらうために、気持ちを合わせるというふうに、方向を変えていったということを研究会の会長を中心に行っていました。

○Dさん

ありがとうございます。

○司会者

それでは他にご質問はございませんか、はいどうぞ。

○Eさん

太田の里で事務局長をしているものです。今、田舎の地方で中山間地域の課題も、それこそ自分のところの地域もほぼ一緒なのですけれども、やっぱり地域コミュニティーで高齢化が増えていて、耕作放棄地もどうにかしていこうと話題も一緒に、交流センターを立ち上げた時点から、こういうのをなんとかしていきたいという思いで、農家の人たちも地域の人たちもみんな入ってきてやってきたのですけれども、やっぱりここに来て人口がなかなか増えてこない。高齢化が進むばかり。耕作放棄地が増えている。従来の影響が大きくて、夜中に見回らないと稲も鹿に食い荒らされる。だんだん農家をすることが辛くなる。みたいな高齢化とともに増えてきていると。交流センターでもなんとか地域の活性のために何らかの形で使ってもらって、交流の中でいい知恵を出してもらってやってもらうような使い方をせなあかんといいつつ、今考えている最中なのですけれども、今日は、那智勝浦町全体も共生域を作りながら、一つの観光地として、もともと熊野の古道と那智の滝とマグロと、大きな観光資源が町の中にはあるのですが、この地域にはあまりにも目立つものがないのだけど、今日来た狙いというのはグリーンツーリズムのひとつの一環の活用として、太田地域を何らかの形で活かしていくというものが、つかめたらいいのかなと。

ひとつ最近動いているのが海外の方を一回受け入れまして、その時にこの地域の方は農家さんが作っている田舎料理、食べていただくとすごく反応が良くて、反響がすごくて、その作り方というものを料理教室でやらせて欲しいと、ドイツの来られた1名の方が出て、これを12月からツアーで受け入れるような形をなんとかやろうとしています。そこで料理の教室みたいなことをとりあえず、上手くいくかわからないけれどもやってみて、上手くいけば他の体験みたいなことにつなげていきたいと思っていて、これをしていると農業体験というのがうまく、中津村の方から広がってやっているし、できているのだけれども、自分のところの地域で農家民泊を含めて体験的にできるような仕掛けをね、作っていこうとすると何がどういう形が一番ベターなのか、よくわかんないのですよ。

僕も那智勝浦町の移住定住協議会長をやっているもので、ただ実際に交流センターで事務局長をやっていると、なかなか時間的に余裕がなくて、いろんな形で区長連合会等で話をした時に、ぜひとも体験のできる場所の提供もまず第一ではないかということ、町の職員とも一緒にやっています。町に空き家はあるのだけれども、ただ年に一回、二回、帰ってくるのに荷物は置いている、箱は置いている。非常に空き家をちょっと貸してくれたら、なんとか人を移住したいという方をおられる。太田の里に来て、いいとこだと思って移住したいと思っても、なかなか家もないというようなことがあって、ようやく一組ともう一組がなんとかかなりそうな雰囲気があるので、もうちょっと広くこれさから先、ほんまに地域を活性化しようと思ったら、受け入れしていかないと、若い人たちを僕の後釜もないというの

が事実。それを生かしていこうと思ったら、先ほど出た後継者問題というのは何事についてもついて回るので、やっぱり何かを仕掛けて、ここにきたらこういう楽しいことがある。都会ではないことができる。生活できそう。そういう仕掛けをどうやったら一番ベターかということのを頭で思いつつ、ただ何らかの形で人が来てもらう仕掛けをすることが先かなあと思っていて、どういう仕掛けから始めることがベターかと、一つ悩んでいるのですけれども、海外のインバウンドで1回体験するのですけれども、今よく受け入れられているじゃないですか。一番喜ばれているものみたいなやり方って何か、确实論はないと思うのですけれども、仕掛けとして一つできればSNSなり使えばすぐ来そうな雰囲気はあるのですね。

それで、もともとうちに来ている地域おこし協力隊の女の子というのが、海外の経験者なので、その場合、海外経験者で熊野古道の観光の案内をしてくれているので彼女もやっぱり太田の地域のことを考えてくれていて、これからお寺が民泊を始めたのがあって、そこに海外の方が泊まられたら、是非とも交流センターで食事を、あそこは学校の跡なので、教室を何とか活用してなんか体験のことを考えてやってくれと言われていて、一つは踊りの教室をやっているの、そこに来てもらえれば一緒に体験できるんで、なんかそういうことから始めようかみたいなことをやろうかなと仕掛けています。それがひとつのきっかけでうまく広がればいいかなと思っていますけれども、ただこれが不安であるのだけれども、なんか広げるためのいい形というのはうまくヒントがあればと思っていますけど、すみません、お願いします。

○原見氏

申し訳ないです。今すぐには浮かばないですけども、一度インバウンドを受け入れたということもあるし、受け入れた後で、地域で何かされました？反省等々は？

○Eさん

そこまでっていないですね。

○原見氏

あの、そのインバウンドの方を、モニターツアーにお願いするというのは、お客さんに失礼かも分かりませんが、やっぱり何かの機会にモニターになってもらって、それを叩き台にして、その後の反省会が必要かなと思います。お茶を飲みながら、「よかったよ」、「ここがもうちょっと」とみんなで話し合うことによって、意識の徹底（意志の統一）ができてくると思うのです。一人であれやこれやと悩むのは個人的なものです、みんなで集まって話をすると、みんな同じ気持ちになれると思います。その積み重ねで、自分たちは、インバウンドの受け入れは無理かもしれないけれど、こちらを気に入って住みたいという人が出てくるかもしれない。この地域がどのような人に望まれているかが見えてくるような気がしま

す。いろんな人を受け入れる中で、地域の方にとって、何が一番自分達の所に合うのか考えていただけたら、一番いいのではと思います。

話が違いますが、私たちも設立当初からこのような会を開いたり、視察に行きました。視察に行く時にバスを借りて行き研修を受け、帰りのバスの中で何をするかと言うと、あそこどうだった、こうだったなど、その行ったところの話をいっぱいするのです。

あそこは良かったな、アイデアをもらえるのかな、あそこはちょっとなあとか、あそこはものすごくすぎるから、あれをうちのやり方でアレンジしなければいけないとか、そのような話や反省をバスの中でわいわいやってきました。ゆめ倶楽部 21 の設立当初は特に多く、意思疎通はみんなの意見で、また違う意見が出てきても当然で、そういう意見もありかなと分かるような雰囲気を、会員の中で保てるというのが大切かなと思いました。

○植田氏

大分にいた時です。お客さんが泊まりに来る時は、一泊や二泊だったのですが、中には三泊とかされる方もいました。泊まる拠点は農村民泊ですが、日中は車で子供たちを連れて、近くの遊園地に行ったりとか温泉に行ったり、川に遊びに行くとか、そういう過ごし方もありました。

また安心院ではそこまでプログラムされていないのですが、ヨーロッパの方でグリーンツーリズムを体験した知人の話では、料金の中に一泊の日中に、宿泊した場所は近隣がぶどう農家でワイナリーが近くにあったのですが、料金の中に、リュックサックとパンとバターとそのセットも含まれていて。それで来た方が、日中にそれを持って、自由に周辺を散策するのです。

その農家に泊まったからといって、何も朝から晩まで家の人がつきっきりではなくて、その来た方たちが楽しめるメニューを用意してあげるとか、自分たちで、車でどこか行けるような地図を用意するとかがいいかとは思いますが。多分外国の方は自分たち自由に行きたいと思いが、地図などがあれば。ずっとお客さんについて、おもてなしをしなければならぬとなると、お互い重荷になりますし、来た方も自分たちでちょっと好きにしたいからと、あるかもしれないので、さりげなくこんなプランもありますよ、というような感じで提示してあげると、選択できるのではないかと思います。

逆に泊まった時に、こんなこともできるよ、あんなこともできるよと話をすればいいだけで、体験も大事ですが、あまり体験に重きを置きすぎると、やる方にとってはすごくプレッシャーになるのではないかと思います。

○Eさん

ありがとうございます。ただ地域に合った形というのも、意見を聞きながら探さなきゃいけないのではというねと思っています。

○司会者

それで後、どうでしょう。もうお一方、ご質問がある方はお願いします。

○Fさん

那智勝浦町から来ました。今、農村生活で一番問題になっているのが鳥獣被害なのです。そちらに対する対応は十分できているでしょうか？お願いします。

○原見氏

今、いろんな所に行ってすぐ打ち解ける共通の話題が鳥獣被害の話で、そうだそうだと盛り上がるのです。うちの方では電柵とか、時間がある人はトタンをコツコツ張ったりしています。私個人の気持ちとして、米は絶対食べなきゃいけない、普段の自分が食べる野菜もきちり確保しなくてはいけない、でも野菜を植える時は、獣害被害にあうことは仕方がないのかなど、ちょっと自虐的な考えになっています。

先ほど私が言ったイタドリは、シカの被害があるので周りを囲わなければいけない。中山間部は新しいものを育てるとき、まず鳥獣被害はどうなのかと聞かねばなりません。

○植田氏

安心院でもイノシシとか鹿が出ていたので、それをいかに美味しく料理して、お客さんにメインじゃないのですけれども、食べてもらうかということの勉強会をしていました。お客さんは鹿なのイノシシなのという形で、最初抵抗がありますけれども、美味しく料理すると、たくさんは食べられないのですが、食べていただけるので美味しく頂くことはありました。

○Fさん

ありがとうございます。

○司会者

もっといろんなお話、意見交換をしたかったのですが、もうちょっと時間もおしてきました。それでは最後になりましたが、食農総合研究所副所長の藤田先生の方から最後のご挨拶をお願いしたいと思います。

閉会

ご紹介をいただきました藤田です。食農総合研究所の副所長と言いましても、私と大浦先生は、観光学部の農山村再生ゼミナールというところで日常的に学生たちの教育研究にあたっている教員でございます。

本日は非常に短い時間でしたが、農業の生活体験のビジネス化というテーマで、非常に貴重な先進地のお話をいただくことができました。報告者のお二方、本当にありがとうございました。

今回特に原見さんは、山下さんのピンチヒッターということでしたが、私も県のグリーンツーリズムの推進協議会と一緒にさせて頂いて、スーパー公務員の山下さんを地域の側で支えてこられたのが、原見さんだったので、山下さんの原稿を見ながら普通の人だったら喋られへんだろうなという話をしっかりとフォローしながら喋られていて、さすがだなと思いました。

ただ今日の議論の中で、出てきたことの一つ大切なポイントは、先進地と言われる安心院も日高川も、長野県の飯田も一緒ですが、実は十数年、20年近くかかって、高齢化に伴う後継者をどうつないでいくかという話に、今多くのところが直面しています。

今日もこういうテーマでご披露いただいたわけですが、まだまだ交流とか、あるいは農村のビジネス化というところに、これからだとおっしゃっているところも含めて、日本全国的にこれをどういう風に考えていくのかということに、まさに今問われているのかなと思います。その点で、今日のテーマに関わっていくことで、幾つかキーワード的に出てきたことを申し上げて、私のまとめにしたいと思います。

今日の一つ話の背後にあったのは、最近の消費の傾向としてよく言われますけれども、物を消費するということからコトを消費するという言葉に、シフトしてきているということ。「コト消費」といわれますね。物の価値というのは従来農家というのは、農産物を作って売るところに物の価値があったということなのですが、今日のタイトルにまさに上がっているように、体験というのがビジネスになる。つまりその「コト」というのは物語なのですよね。どういう人がどういう思いで、どういう気候風土のところで、そういうものを生産されているかというような姿が見えるということが、実は価値を持っていて、それにお金を払う人がいるという時代です。

体験旅行も民泊も全てそうでした、その辺りの価値を評価する人が増え始めているのだということは、是非心に留めていただければありがたいと思っています。

もう一つはよくいわれることですけれども、若者・よそ者といわれる人たちのすごいパワーや可能性があるということ。それを活用するかどうかは、地域にかかっていると、こういうことです。

若者に関していうと、今日出てきた体験教育旅行で来る小中高生たちが、地域のお母さ

んたちお父さんたちが、ともすればコンビニがなくて不便だと思っているところに、星空がきれいとか、車の音が聞こえないとか、水が本当に美味しいとか、そのようなことを体験教育旅行の機会に言葉をかけるわけです。それがきっかけとなり、日常生活に眠っているいろんな価値にも気づくというような、この気づきというものを与えるという点で、この若者というのは非常に大きな役割を果たすのではないかと考えています。

最近、我々の大学にも、農村を支援するサークルというのができました。私の学生時代にはおおよそそのようなサークルはなかったのですが、和歌山大学には実は 100 人ぐらい学生が自主的に集まって農村を支援するというサークルができています。彼らは単に農村に興味があって行きたいだけではなくて、本当にしっかりとした作業も含めて、行って帰ってきたりもします。

なぜそういうところに関心があるのかということ、やはりそこには人の魅力であったり、地域ならではの魅力がある、資源の価値が眠っているということに、最近の若い人たちは目を向け始めているということです。そこをどう捉えるかということがポイントになってくる。よそ者ということではえばIターン者もそうです。あるいは今日お話のあったインバウンドも、あえてよそ者です。つまり地域の外にいる人たちの目線で見ると、地域の資源にいろんな光が当たっている。宝物としての価値がわかる。そういうふうなことは、非常に大切なのかなと痛切に思っています。

もちろん地域づくりは地域の人たちが主体となって頑張らないといけないということは、その通りなのですが、地域を多様な形で応援してくれるような、よそからの人たち、その魅力を気付かしてくれる海外の人たちとか、そういった人たちがうまく地域づくりのプレイヤーに引き込むというようなことも、多分必要ではないかと考えています。実はこれを、都市農村交流の「鏡効果」と呼んでいます。

「鏡効果」というのは鏡で映してみないとその姿はわからないということで、自分が住んでいる日常生活の価値はあまりにも当たり前すぎて分かっていない。姿見に映すとその価値がわかる。実はその姿見というのが、先程来出ているよそ者とか若者という人たちなのです。是非そういう人たちと一緒に、地域を作っていくということがこれから求められているのかなということ、私もあちこち回らしてもらいながら感じているところです。今日は原見さんのお話や植田さんのお話の中で、そんなことが感じられたのかなと書いています。

もうひとつのキーワードですが、「関係人口」というような言葉がこれからの地方創生の鍵を握るのではないかと風になっています。地域に住んでいる人だけではなくて多様な形で地域に関わっている方々を活用して、地域を作っていく。それがおそらく、単に人が一人増えたというようなことではなくて、いろんなネットワークが地域の資源に磨きをかけて、おそらくビジネスのチャンスも広げていく。若い人が定住していける可能性が広がっていくのかなと感じていました。

今日は非常に短い時間ではございましたが、そういったキーワードが非常にふんだんに

盛り込まれたご報告をいただき、またフロアからも地域の悩みに即した、色々な話を頂戴できたと思います。御二方、非常に良い報告を頂きました。ありがとうございます。併せて感謝を申し上げたいと思います。

併せて、このようなシンポジウムをご準備頂いた関係機関の皆さま、和歌山大学を代表しまして改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

付属資料

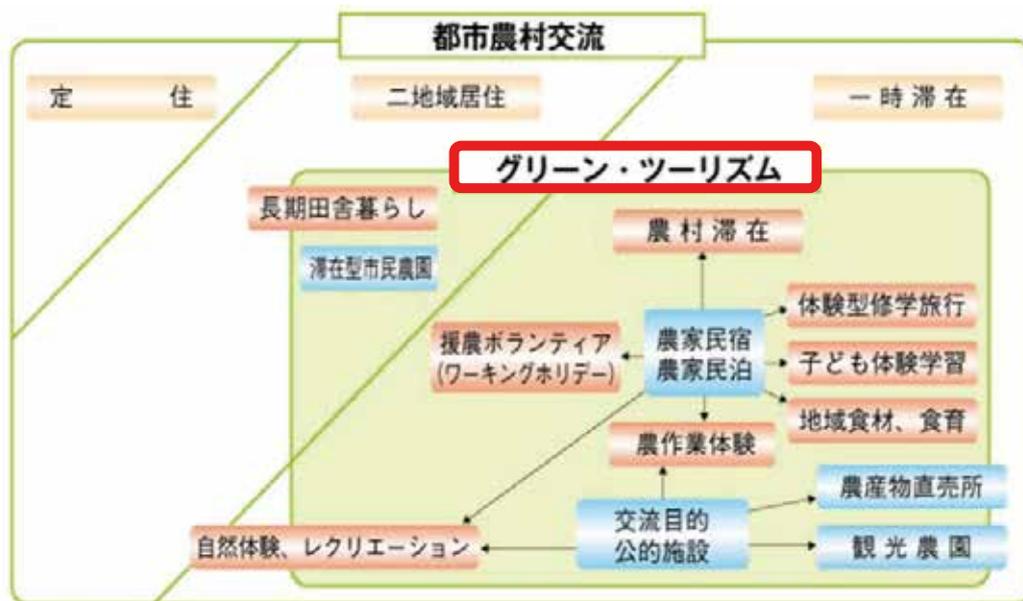
グリーンツーリズムの展開と推進上の課題



2019年11月25日(月)
和歌山大学 食農総合研究所
特任助教 植田淳子

1

都市農村交流の一つの形...



資料：農林水産省作成

2

●近年、日本において
農村地域やその活動が着目されるようになった背景

【農山村地域】
高齢化や過疎化の進行
集落の維持・管理が困難に
なっている状況

農家の女性が主となった活動
* 農産物直売所
* 農家レストラン
* 農家民泊
* 加工や体験活動 等

【都市部】
都会での生活のストレスから
自然の中での、リラックスや
リフレッシュを希望

安全・安心な食を求める傾向
田舎の食材を使った加工品の
購入希望

自然の中で、体験や地元の人
との
“心の触れ合い”を希望



3

グリーンツーリズムと
これまでの観光開発のちがい

「グリーンツーリズム」って
何なの？



4

「グリーンツーリズム」

田舎に大きなホテルや旅館を立てるのではなく
今ある農家や漁村の**田舎の生活**を
そのまま開放してお客さんをお迎えし

都会の人たちや子ども達に、
農村の生活や農作業をそのまま経験してもらい
楽しんでもらう
新しい旅のスタイルです！

家に他人が
泊りに来るの？



もともと、ヨーロッパ（フランス・
ドイツ・イギリス等）からスタート。

5

これまでのリゾート開発

なんかハテなのが
できたわね～



さあさあ！お客さん
お金を使ってください！



グリーンツーリズム



そのままの家



農村の暮らし

また、来ました～
泊めてください

よう、きたね！
ゆっくり、
していきなさい！



6

日本におけるグリーンツーリズムの形態



農家(村) 民泊



農産物加工体験



農業体験



農家レストラン
(地産地消の食事)



農産物直売所

7

「グリーンツーリズム」で大事なこと

- ① 農村部にて、様々な仕掛け（取り組み）を行い、都市部の人に、足を運んでもらう動き
- ② 訪れるだけではなく、ゆっくり滞在してもらう動き（施設）体験や交流も含む
経験や感動を提供し、対価を頂く。
- ③ 帰りには地域のお土産を購入し、その町のリピーターをつくること
いってらっしゃい またおいで！

8

グリーンツーリズムを始める際に 地域の人が**最初に行ったことは・・・？**

自分たちが住む地域に
どんなモノがあるのかを知ること。
(歴史、食べもの、文化、昔から大事にされてきた場所など
村のお年寄りに生の話を聞きに行く、ガイドの案内で行く)

『ふるさと探訪の旅』 を開催！



- *自分たちの町を、見て聞いて知るためのツアー
- *地域のお年寄りを訪問
- *自分たちで、現場を見に行く
- *見に行ったあとは、宝物マップを作成



11

グリーンツーリズムで訪れた人が **喜んだことは・・・？**

地域の美味しいものを食べられること
郷土料理づくり体験など

地元の方と語りいながら、ゆっくり食べて飲んで
自然の中でのんびりしたい！

『農村民泊』『スローフード』イベント等 地域の食や、食文化に触れること

- *自分たちの昔から食べてきた、その地域
ならではの食を知ること
- *食事を提供できる場があること
- *希望があれば、一緒に体験できること
- *何度も来てもらえるよう、楽しい交流を！
「地域のファンを増やしていく」



12

親戚のうちに遊びに来るような時間



13



14

農家の方とお客さんと一緒に食事



15

地域の旬の食材を、地域の料理で



食材の準備

秋の味覚 自然薯

アミタケ(キノコ)

お客さんを迎えるために、食材を用意する楽しみ

通常の農家の田舎の食事とともに、

この時期、この地域でしか食べられないものの提供

16



山で採ってきたキノコ
は鍋料理に…

自然薯は擦りおろし
カボスを添えて…
酢醤油で

地域の食や、食文化を楽しむ
味わう！

訪れた人が
それらを食べることができる
場（店）があること



17

【和歌山県内 農家民泊施設の認定数と宿泊者数の推移】

表1 和歌山県 農家民泊施設等 認定制度における 認定件数と宿泊者数の推移
(H31年 現在)

	H18	H21	H24	H27	H30
農家民泊施設数 (旅館業法の許可取得済)	0	45	74	95	114
宿泊者数	0	559	1,763	3,277	5,402
うち 日本人	—	—	1,338	2,248	2,296
うち 外国人	—	—	425	1,029	3,106

資料:和歌山県果樹園芸課より作成

「—」は未調整を示す。

18

【今後、和歌山県・関西へ集客が期待できるイベント等】

- 2004年 紀伊山地の霊場と参詣道
【3つの霊場(熊野三山や高野山、熊野参詣道など)で構成される文化遺産】

- 2020年 東京オリンピック
- 2021年 ワールドマスターズゲームズ
中高年齢者のための世界規模の国際総合競技大会。
- 2025年 日本国際博覧会 (大阪市にて)

国内だけではなく、多くの訪日観光客が見込めます。
地域に来てもらい、買い物・宿泊・体験・滞在することができ
地域のファンになってもらえるような取り組みの推進を…！

19



20

◎グリーンツーリズムの課題

- 来たお客さんに、地元の良さをどのようにPRしていくか？

⇒情報発信（HP,SNS等）が大切
更新されている、最新の情報
口コミも大事な情報手段

【地域の良さとは…？】

昔から住んでいる地元の方…農家の方や商売の方だけではなく、若い方や、新しく来られた方も交えて、「地域をどうしていくか」「魅力ある、訪れてみたい・住んでみたい地域とはどんなところか」住民の中で、話してみる。

21

◎グリーンツーリズムの課題

- グリーンツーリズムや観光などで来たお客さんに、地域を循環してもらう仕組みをつくるには？

⇒農家、加工グループ、商工会、観光協会、行政などとの連携が大事
⇒入り口は一つに。情報の集約
外部の人に、分かりやすい窓口が必要。
⇒1軒、一つの組織で、完結すると無理が生じる。
互いのことが分かる、風通しのいい町に人が集まるのでは？
情報共有が大事
⇒技の継承 学びの場の設定

22

中山間地域を活かす ～人こそが地域を創る



1

日高川町の概要

- ▶ 和歌山県のほぼ中央部
(大阪市内より車で約2時間)
- ▶ 最寄り駅は御坊駅(藤並駅)
高速では川辺IC(有田IC)
- 平成17年に川辺町・
中津村・美山村が合併して
誕生



2

日高川町の拡大地図



3

観光



道成寺



ふじまつり



鷺の川大滝

メジャーなスポット、マイナーなスポットが他にも色々

4

日高川町の人口



平成14年 11,767人(4,075世帯)

令和元年 9,822人(4,210世帯)

※目標数値 2027年 8,900人

(第2次 日高川町 長期総合計画より)



5

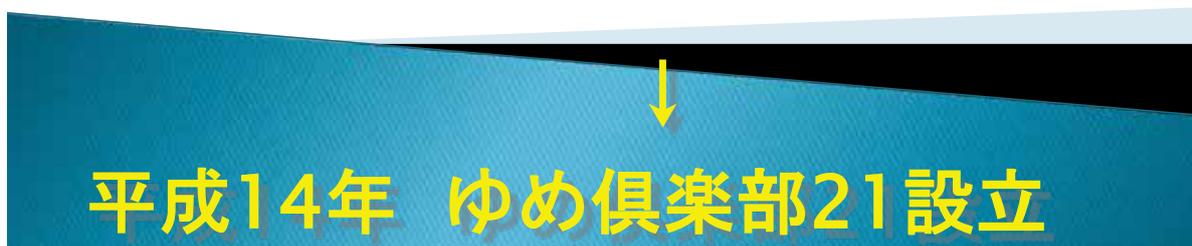
中山間地域の課題・・・

地域コミュニティの危機 (高齢化・人口減)

耕作放棄地の増加

(高齢化・鳥獣被害からなる農業生産意欲の低下)

人材不足 (商工業・観光・交流産業分野)



平成14年 ゆめ倶楽部21設立

6

ゆめ倶楽部21のテーマ 体験から交流、交流から定住へ



The First Stage 平成6年11月～12年11月

発端、契機となった事柄



The First Stage

社会教育、生涯学習の場 立ち上げ

移住者囲炉裏会議



女性会議



9

The First Stage

21世紀は農林業しかない

高齢化・少子化



近い将来、
この村はエライことになる

耕作放棄地が農地の1割



10

The First Stage

観光イベントの立ち上げ

筏アドベンチャー ～60m



ほたる祭り、紅葉祭り

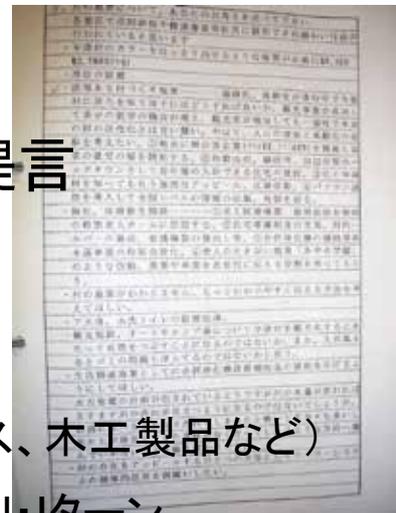


11

The First Stage

移住者囲炉裏会議からの提言

- ・特産農産物の再開発
- ・稲作体験ツアー
- ・間伐材の付加価値販売(ログハウス、木工製品など)
- ・リストラ者の農業、林業への就労、U・Iターン
- ・新規就農希望者向けセミナー



...



多くのヒントを得る

12

中津ファン倶楽部の開設 ゆめ倶楽部21の立ち上げへ

体験型観光の推進

13

The Second Stage

受入れ協議会(ゆめ倶楽部21)の発足

平成14年2月

┆ ターン者と地元住民との協働

発足時は「体験型観光」を中心に展開

2,500人×1,000~2,500円の売上

「体験から交流、交流から定住へ」をテーマ

14

The Second Stage

「よそ者ってないんやで、みんなでやろら！」
～Iターンのスキルを活かす。広報代は無料



15

The Second Stage 教育旅行

・「ちょっとぐらい儲けよら！」～持続可能な町づくりは、
やっぱり「やりがい」です。



16

The Second Stage 農家民泊 断らない勇氣

～インストラクターさんの家へ、一軒一軒お願いに。



実施後は、人と人との繋がりが
「やって良かった！！！」

17

The Second Stage

体験メニューのブラッシュアップ



18

The Second Stage

☆その後・・・体験型観光客の増加

初年度 864人

～

H30年度 1,821人

累計 39,074人



19

The Second Stage

☆その後・・・農家民泊の参加者増加(インバウンド)

	国内客	国外客	計
初年度 (平成20年度)	54人	0人	54人
～			
平成30年度	34人	93人	127人
累計受入人数	1154人	1160人	2314人



20

The Second Stage

「学と官」との連携による地域振興の取組み
～大学での知識を活かして地域貢献に努める～

・平成15年6月24日に初めて、和歌山大学経済学部
橋本教授に**面会の申し出**



21

The Second Stage

橋本教授からの提案

「**教育機関との連携**により都市住民を受け入れる
システムを構築するための方策を探る」

☆「**ホスピタリティー**（おもてなし）」の心

☆**オンリーワン**の発想

☆**腰のすわった交流**

☆**マーケティング調査**



22

The Second Stage

交流を継続・・・

- ・大学祭へ出展
- ・「滞在型観光の推進に関する意向調査」結果報告会開催
※大学生の調査アンケートを発表
- ・卒業論文発表会



●民泊等を通じて交流してきた大学

- ・桃山学院大学
 - ・京都光華女子大学
 - ・和歌山大学
 - ・和歌山信愛大学
- 等々...



23

The Third Stage 移住への道

平成19年4月 ～

24

The Third Stage

わかやま田舎暮らし支援事業

～Iターン者の増加



わかやま田舎暮らし支援町で県下をリードする実績！！

H26年度	4世帯	5人(平均年齢	約44歳)
H27年度	7世帯	11人(平均年齢	約39歳)
H28年度	9世帯	13人(平均年齢	約32歳)
H29年度	9世帯	16人(平均年齢	約40歳)
H30年度	8世帯	18人(平均年齢	約44歳)

25

The Third Stage

「米づくり塾」の活況

～これも、「田植え体験」からヒントを得た！

「食の安全・安心」私が栽培して収穫した「米」だから
脱穀の時の感動もひとしおです！！



26

The Third Stage

受け入れ側のメリット

集落自治の立て直し
移住者のスキルを生かす
空き家の保全
耕作放棄農地の解消
地方交付税の加算



27

The Third Stage

移住者側のメリット

定年後の生活が充実
スローライフの実現(菜園づくり、安心・安全な野菜)
基本的農業技術の取得(就農支援センターと連携)

「人と人との温かな交流」
「地域づくりへの参画」
スキルの提供で「地域貢献」



28

The Third Stage

お試し滞在施設



風呂谷ビレッジ

地域住民が個人で運営
オーナー柏木さんとの交流



てんこそら

日高川町が設置
町営住宅の空き部屋を活用

29

The Third Stage

ワンストップパーソンの設置

日高川町への相談窓口
(町役場職員)



～地域の案内
空き家さがし

あらゆる相談を
一手に引き受けます！

30

今後の展開 アグリビジネスの創出

31

今後の展開

農家民泊の受入れ拡大



32

今後の展開

移住推進

「田舎暮らし希望者の
お試し滞在」



33

即戦力のある「造花」よりも・・・

人と人が苦しみながら育てた「花」が良い

「人こそが地域を創る」

クローズアップ現代 大林宣彦 監督の言葉

34

ご清聴ありがとうございました。



「食農総合研究所研究成果」一覧

資料番号	課 題 名	報告者（著者）	発表年次
1	和歌山県への移住者の実態と受入協議会の課題	辻和良 植田淳子 藤田武弘	2017.3
2	地域経営のための合意形成と組織づくり	玉井常貴	2017.6
3	イノベーションが起こる地域社会創造を目指して ー求められる共創の場づくりー	牧野光朗	2017.6
4	田辺市龍神村におけるUIターン者・女性活動の現状と課題	小川さだ 竹内雅一	2018.3
5	神戸大学と篠山市の地域連携活動の展開と課題	橋田薫 竹内聖司 垣内由起子 北山透	2018.3
6	多角化の視点から考える6次産業化	櫻井清一	2018.3
7	和歌山県農業展開史	橋本卓爾 大西敏夫 辻和良 湯崎真梨子 杵本敏男	2018.3
8	園芸産地の振興と人材育成	板橋衛 辻和良	2018.8
9	農業体験農園の可能性を考える	藤井至 池田信義	2018.12
10	日高川町ゆめ倶楽部21の体験型観光・移住支援等の取り組みと課題	直川裕子ほか	2019.3
11	交流・体験型農産物直売所の現状と課題 ー全国JAアンケートおよび現地調査結果をもとにー	辻和良 岸上光克 藤田武弘	2020.2
12	一般社団法人南紀州交流公社の都市農村交流の取り組みと課題	佐本真志	2020.2
13	地方創生時代の農産物直売所に求められる機能と新たな運営方式ー交流・体験型直売所の展開を中心にー	岸上光克 櫻井清一 辻和良 植田淳子 藤田武弘	2020.2
14	和歌山県農業展開史 II	辻和良ほか	2020.3
15	拠点づくりからの農山村再生 ー田園回帰時代の新たな農村計画論ー	中塚雅也	2020.6
16	農業・農村生活体験のビジネス化	植田淳子 原見知子	2020.6

食農総合研究教育センター研究成果 第16号
2020年6月 発行

著作者
編 集
発行所

植田淳子 原見知子
食農総合研究教育センター
和歌山大学食農総合研究教育センター
〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930
TEL. (073)457-7126

印刷所

中和印刷紙器株式会社
〒640-8225 和歌山市久保丁4-53
TEL. (073)431-4411

